―著者―推薦文

「政治が貧困なのは現代の日本に限ったことではない。」

場の理論を創始したマイケル・ファラデーは近代物理学の開祖の一人である。彼の研究室を訪れた英国の政治家の逸話で始まる本書の書き出しをこのように決めて書き上げたのは、二〇〇九年六月九日のことであった。歴史的な政権交代が起こったのは、その年の晩夏のことである。

そのとき私は、この書き出しのせいで、この本はわずか三ヶ月で時代遅れになってしまったのではないか、と真剣に思ったものである。しかし、そんな期待はあっという間に裏切られ、わが国の政治状況が坂道を転げ落ちるように悪化しているというのは、衆目の一致するところであろう。

悪くなったのは政治だけではない。一九ページ脚註に「わが国の家電製品が世界を席巻」とあるが、実はこの二〇〇九年を境に世界最大の家電メーカーは韓国の三星(サムスン)電子に取って代わられてしまっているし、七四ページ脚註の三洋電機の家電事業は、最近中国の海爾(ハイアール)集団(グループ)に売却されてしまった。

ふだん西暦しか用いないと決めているくせに、わたしは最近「今は昭和何年だろうか？」と自問することがよくある。八七年、という答えを期待しているのではない。昭和二十年の敗戦と同じような破滅まであと何年か、ということである。平和憲法のおかげで、戦争に取られて国家権力によって殺される心配はなくなったので、懸念していたのは、財政破綻によるハイパーインフレが起こり、これまで築き上げてきた社会と生活が瓦解してしまうことである。

しかし、昨年三月の大震災後の原発事故は、それだけでは済まないことを露呈した。国も電力会社も学界も、原子力に携わる多くの人びとの無能と不誠実によって、多数の市民の命が脅かされるような状況がいとも簡単に起こってしまった。彼らの隠蔽体質と人命軽視は大本営と同じだし、彼らの無事故神話は帝國陸海軍の不敗神話と何ら変わらないではないか。

東京大学の責任も大きい。「原子力国際専攻」のホームページの学生向けメッセージを読んでご覧なさい。彼らには責任感も当事者意識も窺えない。よくまあ臆面もなくあんなことが書けると、呆れて言葉も出ない。

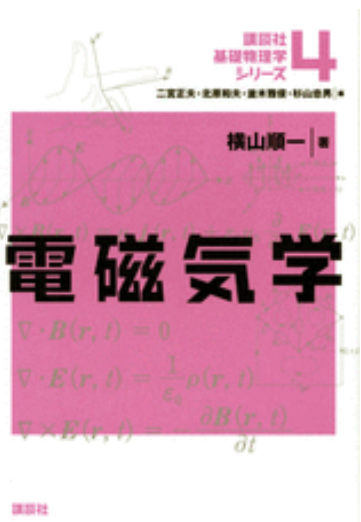
だからといって、では原子力ムラの人びとを全部粛清すれば済むかというと、そうはいかない。原子力発電所数十年の歴史によって既に大量に発生してしまった放射性廃棄物を、今後数十万年に亘って自然界から隔離して管理する、という重要な仕事が残っているのである。原子力工学の今後は、こうした出口戦略をさぐることに限られていくことだろう。真珠湾攻撃に際し、戦争終結のビジョンを全く持っていなかった旧日本軍と、この点に於いてもなんと似ていることだろうか。

こうした厳しい時代にあっても、否そうであればこそ、私たちは学問の灯を絶やしてはならない。戦中戦後の困難な時代、先達がいかにこれを守ってきたか、例えば朝永振一郎博士の随筆を読まれると良い。

新入生の諸君。大学受験から漸く解放され、ホッとしていることでしょう。しかし、大学受験の出題範囲はなぜか高校課程に厳密に限られ、現在のゆとり教育の高校課程の問題をどんなに解けるようになっても、大学で学問をはじめる必要条件を満たしていることにはならない。

私はこうしたギャップを埋めるために、この本を書いた。三部構成スパイラル学修方式がくふうを凝らした点である。しかし、自ら進んで読破しなければダメである。大学に入ったら諸君は生徒から学生になったのであって、学生というのは自ら学んで立たねばならないのである。教員はその手助けをするのみである。

原子力工学の例を引くまでもなく、良きにつけ悪しきにつけ、東京大学の学問がわが国の学問の質を決める重要な指標の一つであることは疑いない。諸君はそのような自覚と責任感を持って学問に精励して欲しい。

さて、先刻の自問に戻ると、現在は昭和一二年から一四年頃に対応するのではないか、との思いを禁じ得ない。あるいは次の大震災の到来はもっと早いかもしれない。しかし、今回の大震災で、指導者層の無能とは裏腹に世界を驚嘆させたのは、一般市民の忍耐強さと民度の高さであった。さすが世界一の文化を築き上げただけのことはある。したがって、前回同様破綻後の回復も速いだろう。諸君の時代の到来である。

（横山 順一）